

# 開発途上国の農業普及

「ビルマ編」

昭和63年7月

国際協力事業団

農開技

JR

88-34





18153

JICA LIBRARY



1067637[L7]



国際協力事業団

18153

## はじめに

増大かつ多様化する開発途上国との農業技術協力において、農業普及分野の協力はこれら諸国の農業振興を図る上で極めて重要な役割を果たすものである。このため、本分野に対する我が国の協力体制の充実のみならず、開発途上国の農業普及事業を体系的に整理しておくことは、関係者間で強く要望されているところである。

今般、全国農業普及協会及びビルマ中央農業開発訓練センター計画元専門家 中村成二氏の全面的な協力を得て、『農業普及の手引き「ビルマ編」』が作成された。

本手引が今後、ビルマとの農業普及及び広く開発途上国との農業普及分野の国際協力に携わる関係者のお役に立つことを心から念願するものである。

おわりに、この手引きの作成に当り御協力いただいた関係者各位のご尽力に対し深甚なる謝意を表する次第である。

昭和63年5月

国際協力事業団  
農業開発協力部長  
宮本和美



# 目 次

I. ビルマという国	1
I-1 国名	1
I-2 位置, 面積	1
I-3 人口及び人種構成	1
I-4 言語, 宗教	4
I-5 ビルマ略史	9
I-6 政治体制	13
I-7 教育	14
II. ビルマの風土	18
II-1 ビルマの地勢	18
II-2 気候	20
II-3 農村と都市	25
1) 農 村	25
2) 都 市	27
II-4 交通	33
1) 鉄道	33
2) 道路	35
3) 空路	35
4) 水路	36
II-5 人々の生活	36
III. ビルマの経済と産業	38
III-1 ビルマの経済	38
1) 国民所得	38
2) 貿易	38
3) 財政	41
III-2 主要産業	42
1) 工業	42
2) 鉱業	43
3) 林業	43
IV. ビルマの農業	45
IV-1 ビルマは一大農業国	45
IV-2 農耕地	47
IV-3 農家とその経営	51

IV-4	主要作物	56
IV-5	生産資材と生産手段	62
V	ビルマの農業改良普及事業	68
V-1	農業公社	68
V-2	試験研究体制	71
	1) 農業研究所	71
	2) 中央農場・種子農場と応用研究部	72
V-3	普及組織	76
V-4	普及活動	80
V-5	普及職員の研修	81
	1) 普及職員の資質	81
	2) 普及職員の研修	82



## 1. ビルマという国

### 1-1 国名

ビルマの現在の正式な国名は、ビルマ連邦社会主義共和国 (Socialist Republic of the Union of Burma) である。英領ビルマ時代、日本軍のビルマ占領時代を経て、1948年 (昭和23年) 1月4日、連邦政府共和国として独立、その後1962年 (昭和37年) 3月2日の軍クーデターによって軍政に移行、それ以前の憲法が停止された。そして、ビルマ社会主義計画党が結成され、1973年 (昭和48年) 12月「ビルマ連邦社会主義共和国憲法」が国民投票によって採択され、翌1974年 (昭和49年) 1~2月に人民議会議員選挙を実施し、民政移管が実現して以来、この国名が正式に誕生した。

ビルマはもともと多民族国家である。多数民族であるビルマ族を中心とするが、いくつかの少数民族も含まれている。そこでビルマ族が中心に支配する地域は、管区 (Division) に分けられ行政区画を構成するが、その周辺の少数民族の多く居住する地域は、州 (State) として位置づけられ、それらと連邦を構成している。それらの州は、アラカン (Arakan)、チン (Chin)、カチン (Kachin)、シャン (Shan)、カヤー (Kayah)、カレン (Karen)、モン (Mon) の7州である。また管区は、ラングーン (Rangoon)、イラワジ (Irrawaddy)、ペグー (Pegu)、マグエ (Magwe)、マンダレー (Mandalay)、サガイン (Sagaing)、テナサリム (Tennasarim) の7つに分かれている。従ってビルマ連邦社会主義共和国は、7州7管区の連邦共和国である。

### 1-2 位置、面積

ビルマは、アジア大陸に属するが東南アジア諸国の中では、もっとも北西に位置する。西はバングラデシュ、インド、北は中国、東はラオス、タイと国境を接し、南はアンダマン海、ベンガル湾に面している。

国上の主体は北緯16度から28度まで南北約1,400km、東経92度から101度まで東西約900kmの範囲を占め、南北に長い菱形である。ただし、南東部マレー半島にはテナサリム (Tenasserim) 地方が北緯10度まで細長くのびており、その形は凧にたとえられる。総面積は67万8,033平方キロ、日本の約1.8倍である。

### 1-3 人口及び人種構成

ビルマの総人口は、1987/88年 (昭和62年度) 国会報告書によると、3785万人 (1986/87年) である。前年比人口増加率は1.98%となっている。10年前の人口をみると約3,100万人で、年々の人口増加率はほぼ2%前後に推移している。同じ国会報告書でみる年代別人口とその割分は、表1-1のとおりである。全体の約5.7%が15~59才の就業可能人口であり、約7%が60才以上の高齢人口となる。男女比は、ほぼ半々であるが、高齢者では女性人口がわずかに上回る。



表1-1 年代別人口と割合(1986/87)

単位1,000人

項目	年代	0~14才	15~59才	60才以上	計
	男	数	6897	10655	1217
%		36.75	56.77	6.48	100.00
女	数	6853	10858	1370	19081
	%	35.92	56.90	7.18	100.00
計	数	13750	21513	2587	37850
	%	36.33	56.84	6.83	100.00

人口密度を計算してみると、1km<sup>2</sup>当り人口は55.82人となり、近隣する他の東南アジア諸国と比べて、かなり低い数値を示す。1981年の数値が手元でそろったので、比較してみると、フィリピン159.7人、タイ94.4人、インドネシア79.2人等であり、同年のビルマ数値は53.2人であった。

人種構成はきわめて複雑で、細かく分ければ50種にもものぼる民族がいるといわれる。しかし、いわゆるビルマ族としてまとめられる人々が最も多く、全体の60%を越すといわれ主として7管区内に居住している。周辺7州には州名と同じ名称の民族が住み、大別すれば8民族となる。このうちアラカン族はビルマ族の分派ともいわれ、またカヤー族はカレン族の分枝とすることである。比較的多い民族は、シャン族の約9%、カレン族の7%、アラカン族の4%などである。このほかに少数民族がかなり存在し、それぞれの言語、生活習慣を守っている。

さらにインド人(印僑)、中国人(華僑)の存在もかなり目立つ。インド人は英国の植民地政策の一貫として大量に移入され、一時は120万人を数え、金融、知的専門職を中心に華僑を凌ぐ経済力を誇ったが、現体制下になって多くの指導的地位にあったインド人は帰国していった。現在外国人登録しているインド人は、政府発表で7万人といわれているが、実際には他民族との混血も含めてインド系の人口は相当な数にのぼると思われる。また中国人は13世紀ごろから直接移住してきた人々といわれ、福建、広東出身の人々がほとんどあり、やはり政府発表では11万人余といわれているが、ビルマ人との同化も多く、実際には少なくともその培は存在するといわれている。現体制下ではその経済活動が大きく制限され、他の東南アジア諸国内華僑のような経済力はないにしても、かなりの実権をもって、ラングーンなどではチャイナタウンを形成している。

政府系職員の大半はビルマ族の人達であるが、実際にラングーンに居住してみると、インド人、中国人はとくに目立つし、使用人など生活上接触する人達にはカレン系の人達が多い。

#### 1-4 言語・宗教

ビルマの公用語はビルマ語である。元来ビルマ語は人口の70%がこれを母語としていたといわれ、政府はこれを唯一の公用語として定めた。そして現体制下で進められている文盲撲滅運動の成果もあって、全国的に標準共通語としての役割が広がり、現在ではビルマ語がほぼ全土で通用する。ビルマ語は発音こそ日本語にない発音があるが、主語-目的語-動詞の語順であり、付属語としての助詞もあり日本語と似ているといわれる。またビルマ語を表現するためのビルマ文字があり、丸味をもったころころした感じの文字である。7母音字と32子音字が基本となり、左から右への横書きで表わされる。ビルマ文字タイプライターもある。

約1世紀にわたり英国の植民地支配を受け、また独立後も革命前までミッションスクールが多くあり、小学校から高校まで一貫した英語による教育が行われていたため、英語の普及率はきわめて高い。現在はミッションスクールもすべて国有化され、英語教育は廃止されたが、最近再び第1外国語として英語がとり上げられ、小、中学校でもその授業がすすめられている。そこでビルマの人達は、高等教育を受けた人は別として、総じて年輩者の方が英語が上手であり、若い人ほど下手である。また村を尋ねてもだれか1人ぐらいは英語を話す人がいて、この普及率は外国人にとっては大変好都合である。ビルマ人の英語は、イギリス人仕込みのせいか発言にも妙な癖がなく日本人にはわかりやすい。

そのほか、少数民族はそれぞれの言語を持っており、カレン語、シャン語、カチン語、チン語などがある。さらにインド系住民のウルドゥー語、ベンガル語、ヒンドスタニ語、中国系の人達の福建語、広東語なども存在する。

宗教については、どこにいても無数にみられるパゴダで象徴されるように、ビルマは仏教国である。全国民の9割近くが仏教徒といわれる。ビルマの仏教は、南伝の上座部仏教であり、その起源はセイロンといわれる。全土的に仏教が広がったのは11世紀、パガン王朝のころと



得度式におもむく子供



托鉢して歩く青年僧



少年僧の托鉢

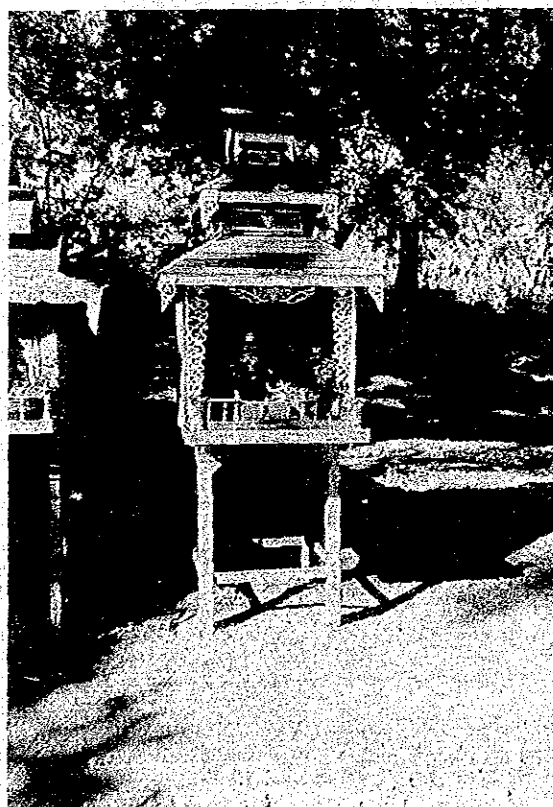
いわれ、パゴダ（仏塔）を作って釈迦をあがめ、僧院で修行をつみ涅槃に至る道を探るものである。そのためどこにいても大小様々なパゴダ（Pagoda）があり、また僧院（Monastery）が存在する。人々は子供が生長すると、一度は得意させ仏門に入れるし、この得度式はかなり派手にお祝いをする。また成人も時には剃髪をしてこの僧院に入り、短かくとも1週間、長い人は数カ月も修行につとめる。僧侶はビルマ語でポンジー（pongyi）と呼ばれ、人々の尊敬の的であり午前中は托鉢して歩き、午後は僧院で瞑想にふける。人々は僧侶を宗教的行事の専門職としてみるのではなく、仏陀への喜捨と同じ意味で僧侶の托鉢に応ずる。また人々は来世を

信じて、パゴダや僧院への寄進は一種の生申輩でもある。

多くの仏教徒は、仏教徒のほかにナツ（Nat）と呼ばれる精霊信仰を持つ。これは沢山の守護霊の集まりであり、中部にあるポパ山という死火山が、その総本山といわれている。ナツはもともとのビルマ土着信仰と思われ、パゴダばかりお参りすると、ナツがやきもちをやくといわれている。路傍によく小さな室の祠をみかけるが、これはナツのためのものであり、その守護霊が来るときだけ花を飾りお供物をする。面白いことに交通安全のナツもあって、多くのドライバーの信仰を集めている。



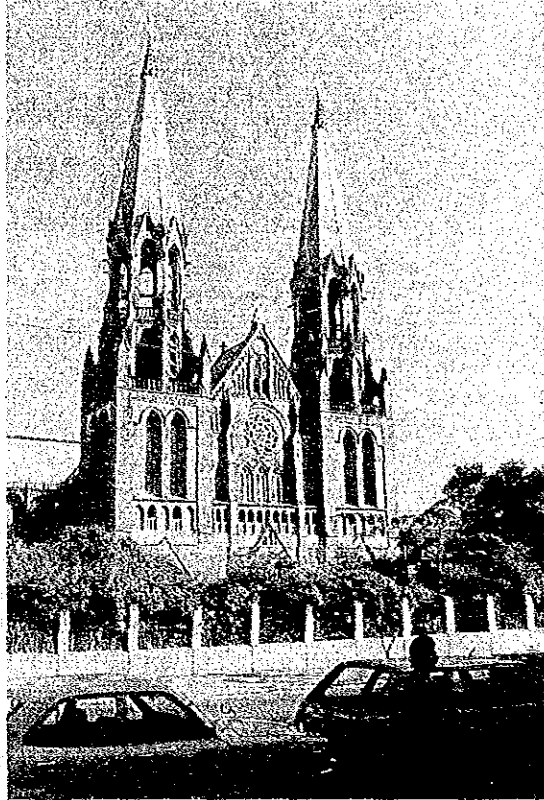
ナツの総本山 ポパ山



道端にあるナツの祠

このほか、キリスト教徒もその数約5%といわれるが、ラングーンではかなり目立つ存在である。イギリス時代の建設と思われるが、ゴシック建築の立派な教会もあるし、プロテスタント教会もかなりの数みられる。カレン族にはクリスチャンが多い。

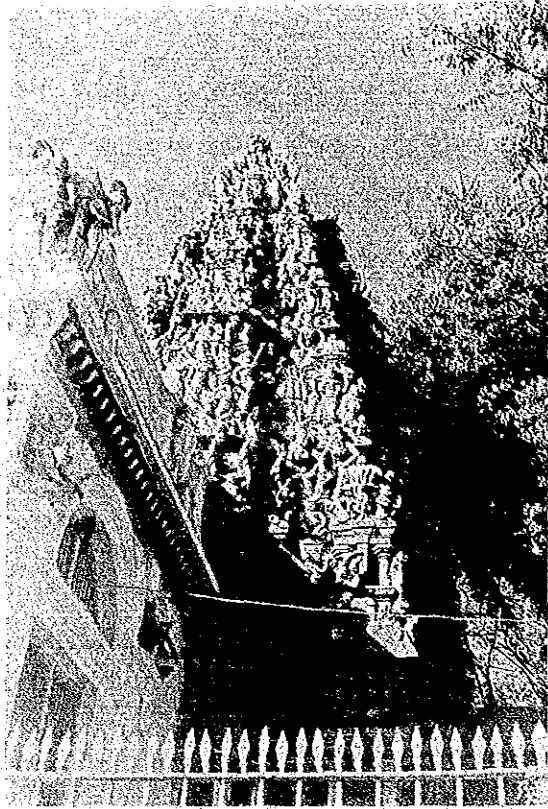
さらに回教徒もその数4%といわれ、モスクもあちらこちらでみかけるし、ヒンドゥー教徒もインド系の人達を中心に存在する。ヒンドゥーテンプルも、独特の装いを施してパゴダの隣に建っていたりする。中国系寺院、廟もその趣向をこらして、チャイトタウンを中心に建っている。



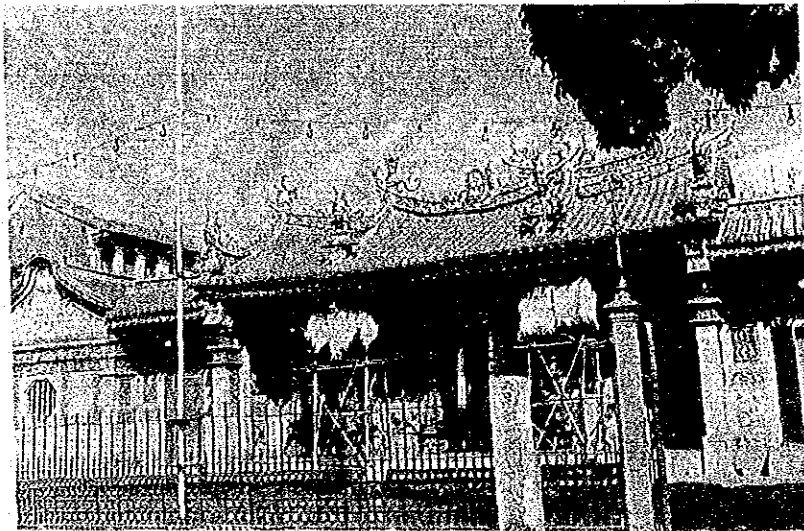
ラングーンにあるローマカトリック教会



ラングーン最大のモスク



ラングーンのアンドゥー・テンプル



ラングーンのアンドゥー・テンプル

ビルマでは、これらの宗教に伴う行事日はすべてひとしく国民祝祭日となる。仏教による満月日、持戒日、ダイン灯祭、回教のイズール・アック、アンドゥーのデワリ、キリスト教のクリスマスなど、すべて国民休日である。これらはクリスマスを除いて、年ごとに異なるので、毎年休日が異なりビルマカレンダーは、外国人にとっては必需品の1つである。



## 1-5 ビルマ略史

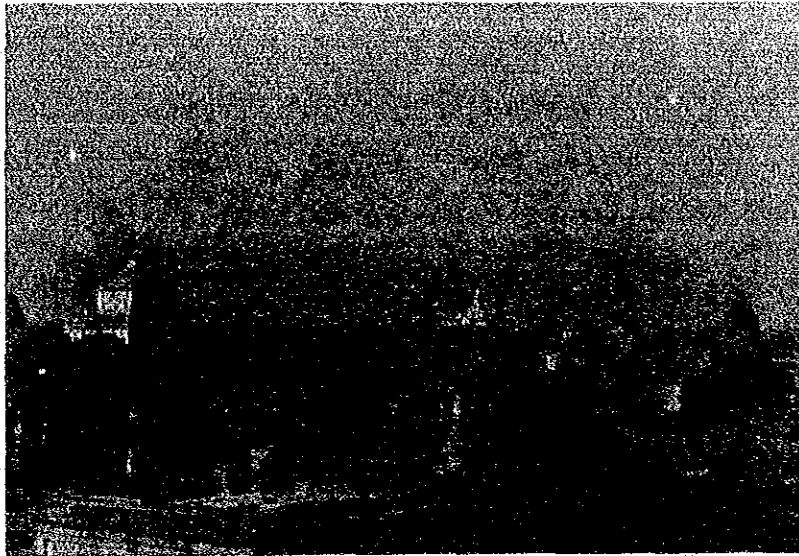
ビルマ族の先祖は、ヒマラヤ山脈北側に住んでいたチベット・ビルマ語族といわれ、漢民族の圧力を回避して南下し、8～9世紀にサルウィン、マヌイカ両河川の上流に住みついたといわれる。その後、それ以前から南方平原地帯にいたピュー族国家が消滅するに及んでイラワジ平野に進出をはじめ、現在のパガンに拠点を持つ最初の統一国家を築くに至る。それは11世紀のことであり、それまでは現在のビルマは、いくつかの種族の割拠時代といえることができる。以下その後の略史について列挙する。

1044年 パガン王朝が成立し、これをビルマ族による第一次制覇と呼ぶ。

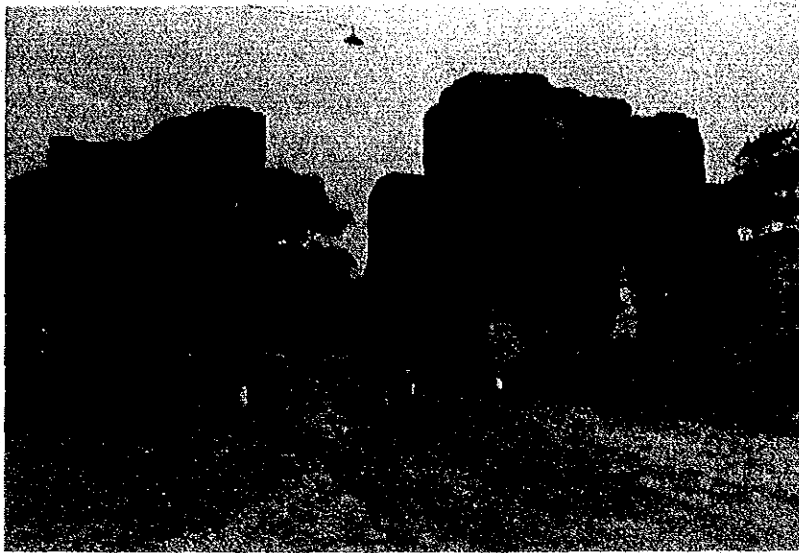
1057年 現在のモン州タトンを攻撃して多数の捕虜をパガンに拉致、そのためモン文化（上座部仏教、文字、稲作技術等）が流入した。

1277年 13世紀まで続いてきたパガン王朝に対して元（蒙古軍）からの圧力がかかり、この10年間に4度の攻撃を受けパガン王朝も南部に遁走、一地方豪族となっ

てしまう。



パガン王朝の遺跡



パガン王朝城壁の残がい

- 1300年 5度目の元の侵寇を退けたシャン族王朝が、ピンヤ、サガインに築城して北方に勢力をばり、南部ではモン人のペゲーでの築城が進み、この両者の争いがしばらく続く。
- 1531年 南方に逃避していたビルマ人は、その後シッタソ河上流のタウングー（現在のペゲー管区）に集結、築城して王朝を確立、全国的にその勢力を伸し、1556、64、69、74年とタイの諸族王国の征服にも成功した。このタウングー王朝をビルマ族による第2次制覇と呼ぶ。
- 1752年 タウングー王朝は軍事的には卓越していたが、相次ぐ術火で次第に衰退を招き、やがて急成長してきたモンの軍勢に倒される。
- 1757年 劣勢であったビルマ族が、その後モン軍を撃破し、ビルマ全土をほぼ平定、コンバウン王朝を設立する。これをビルマ族による第3次制覇という。この王朝も拡張主義政権でタイ国アスタヤ、南西ビルマのアラカン王国などを征服する。コンバウン王朝最後の国王ミンドン及びティーボーは、マングレーにその王宮を作り、今もその城壁が残っている。
- 1886年 1864年すでにテナサリム、アラカン、ペゲーの3地方は英領に編入されていたが、3度の英緬戦争の結果、この年ビルマ王国全土の英領併合が布告された。
- 1897年 インド英国総督令により、ビルマはインドの一省となり、ビルマには副総督が置かれた。
- 1937年 「ビルマ統治法」によってビルマはインドから切り離され、イギリス総督が置かれ、上下2院制の立法評議会が設置された。
- 1943年 その後ビルマ人の反英独立運動は根強く続いていたが、太平洋戦争直前に、ウ・ネ・ウィン現ビルマ社会主義計画党総裁を含む志士30名が日本に渡って軍

事訓練を受け、日本軍に同行して帰国し、ビルマ独立軍をひきいて活躍した。しかし日本軍は当初の約束にもかかわらずビルマの即時独立を認めず、この年になって漸く独立を認め、パーマー政権を成立させた。

1948年 当時国防大臣であったアウン・サンは、日本軍から完全独立をかちとるため国内のあらゆる政治組織を結集して、反ファシスト人民解放同盟（AFPFL）を結成し、日本軍の敗北とともに英国との独立交渉を進め、アウン・サンの暗殺事件があったが、この年の1月4日に完全独立を果し、ビルマ連邦（The Union of Burma）が誕生した。またこの時の抗日運動を記念して、3月27日がビルマ建国記念日となり、さらに独立前年の2月12日、少数民族との統合を協議したことを記念して、連邦記念日（Union Day）が定められている。そして1月4日は独立記念日となった。

1956年 アウン・サンのあとを引継いだウ・ヌーは、AFPFLを背景として政権の座についたが、国軍内共産系将校の反乱があったり、カレン



独立運動の祖、ネ・ウイサラの記念碑



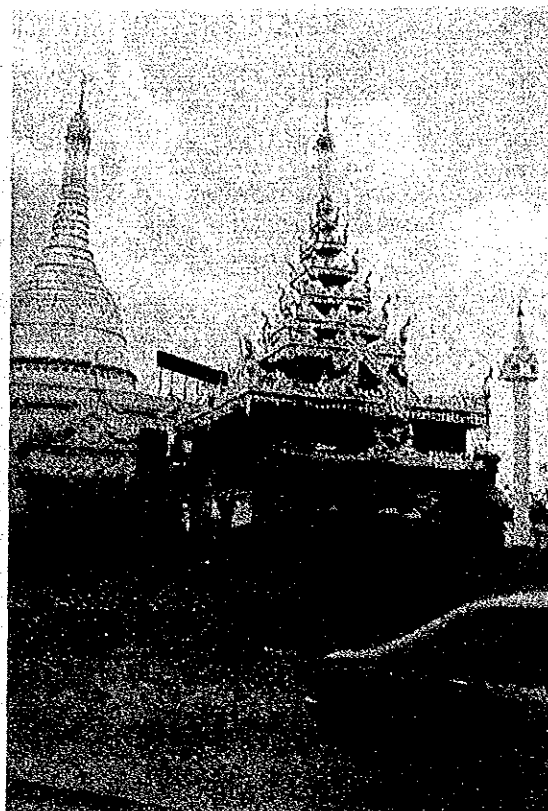
建国の父 アウン・サンの銅像

族の自治要求についての武装蜂起などがあり内紛が相ついだ。そして1952年  
にようやく第1回の総選挙  
が実施されたが、AFPFL  
内にも対立が起り、この年  
の第2回総選挙で与党勢力  
が大敗する。そしてウ・ヌー  
は与党連盟の再建に専念  
し、政権を副首相ウ・バス  
エに譲る。

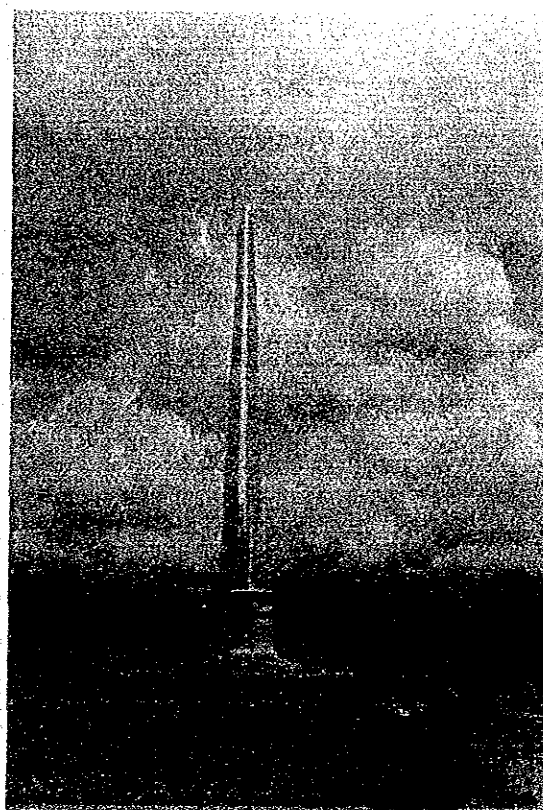
1958年 その後、ウ・ヌー派とウ・  
バスケ派の対立が起り、再  
びウ・ヌーが首相の座につ  
くがその反目が激化し、当  
時の国軍最高司令官ウ・ネ  
・ウィンに選挙管理内閣を  
依頼する。

1960年 選挙管理内閣による総選挙  
はこの年の2月に実施され、  
ウ・ヌー派が勝利を収め、  
ウ・ヌー内閣が再び登場す  
る。

1962年 ウ・ヌー内閣は、少数民族  
の自治権拡大要求、アラカ  
ン、モンの新州設立、仏教  
国教化問題等をかかえ、国  
内混乱が増大した。そして  
政党政治腐敗に失望し、連  
邦制の崩壊を危惧した国軍  
のクーデターがこの年の3月  
に起り、ネ・ウィン将軍が  
革命評議会議長に就任した。  
そして国会の解散、憲法の  
停止が敢行された。同時に



独立後最初の首相ウ・ヌーが私財を投じて  
作ったカバエ(世界平和)パゴダ



ラングーンにある独立記念塔

この年、革命評議会のメンバーを主体としてビルマ社会主義計画党(BSPP)を設立した。

- 1964年 革命評議会は、議会制民主主義による政党政治を否定、生産資本の国有化、社会主義経済体制の確立などビルマ式社会主義路線を打出し、主要流通機構、主要工場の国有化を実施し、全政党を解散せしめた。
- 1974年 新憲法の起草がなされ1973年12月に国民投票で採択され、翌年の1月、人民議会議員の選挙が行われ同年3月には人民議会が招集され、革命評議会はこの議会に政権を返還して、民政移管が実現した。そしてネ・ウィン大統領、セノン・ウィン内閣が誕生する。
- 1977年 その後、国营企業労働者のスト、反政府学生デモ、大統領暗殺未遂事件など大事件が続発したが、その都度戒厳令を発令して軍の力で鎮圧し、この年には、マウン・マウン・カ内閣が誕生する。
- 1978年 第2回人民議会選挙が実施され、人民議会でネ・ウィン大統領が再任される。マウン・マウン・カ首相も再任。
- 1979年 非同盟諸国会議も脱退し、完全中立鎖国的外交政策をとる。
- 1981年 第3回人民議会選挙、ネ・ウィン大統領が辞任し、後継大統領にはビルマ社会主義計画党書記長のウ・サン・ユが選出される。ウ・ネ・ウィンは大統領を辞したが、ビルマ社会主義計画党総裁の地位はそのままで、国政への影響力は残存される。マウン・マウン・カ首相は3選される。
- 1985年 第4回人民議会選挙実施、サン・ユ大統領再選、マウン・マウン・カ首相4選となる。

## I-6 政治体制

ビルマの政体は立憲共和制である。現在の憲法は革命後、1973年12月の国民投票によって採択されたものであり、最高議決機関は人民議会である。これは一院制をとり、全国314タウンシップから選出された450名(現在は489名)の議員によって構成される。人民議会は立法権を行使し、議員の任期は4年である。

人民議会は国家評議会委員を選出し、この評議会委員の互選によって議長が定まる。この議長が大統領である。国家評議会は、人民議会の召集、閣僚評議会、人民司法評議会、人民検察評議会、人民監察評議会の候補者名簿を人民議会への提出、その他内政、外交の重事事項についての権限を持つ。そして閣僚評議会は、また互選によって首相、副首相を定め、経済計画、国家予算などを担当する。

なお、各州(State)、各管区(Division)、タウンシップ(Township)、各区(Village-tract)、村落(Village)の各地方組織には、住民選出による人民評議会(People Council)があり、これらが国権の地方機関である。

新憲法のもとでは、単一政党制が採られ、ビルマ社会主義計画党(BSPP)が唯一の政党である。すべての国家機構はこのBSPPが指導することになっており、党中央委員会メンバーが国家機構の要職にある。また党内には党規律委員会、社会主義経済計画委員会などの組織を持ち、下部に党支部組織及び農民評議会、労働者評議会が結成されている。

注) 現在(1988)の大統領は、ウ・サン・ユ(U San Yu)、首相はウ・マウン・マウン・カ(U Maung Maung Kah)であり、BSPPの総裁はウ・ネ・ウィン(U Ne Win)である。

## I-7 教育

古来ビルマでは、子供を得度させ僧院に送る習慣からか、僧院での寺小屋式教育が普及しており、また独立以降も歴代政府が教育に力を注いできたので、識字率は約80%といわれ、アジア諸国中では高水準を示している。

現政府は革命後、しばらくは経済改革に忙殺されていたため、教育制度の改革を行わなかったが、1965~66年には既存の私立小、中、高校をすべて国有化し、1974年の新憲法制定とともに教育政策の見直しがなされ、現行学校教育制度ができ上がった。それによると、5才からの就学で1年間幼児教育(幼稚園)を実施、6才以降4年間の小学校があってこれを義務教育とする。幼児1年も義務教育に含まれるので、義務教育修了時は9才となる。この時点で4スタンダードのテストがあり、これに合格しなければ落第もあり、また中学校への進学もできない。義務教育への法的措置はとくにないようであるが、小学校の就学率は90%以上といわれ、ほぼ全員が就学していると思われる。

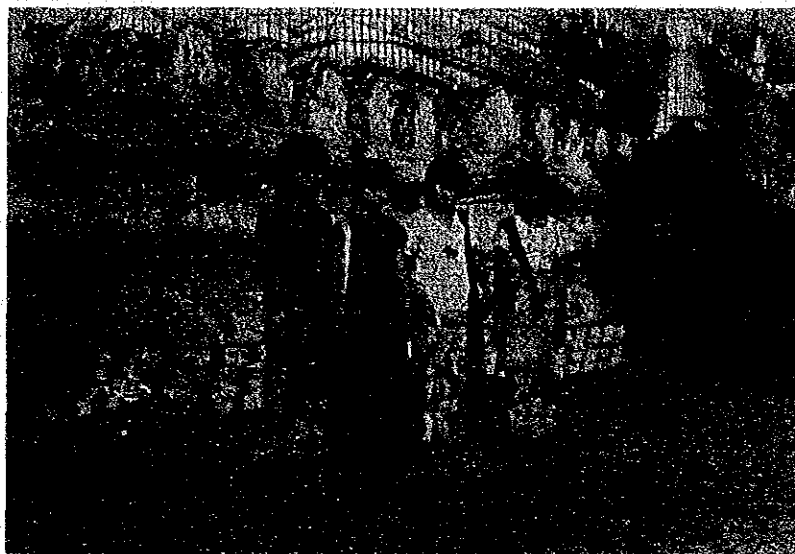
中学校は4年制であり、順調な生徒は10~13才ということになる。中学校への就学率は20~30%といわれるが、ラングーンのような都市部では、その割合はかなり高いようにみえる。中学校修了時にも地域試験委員会による8スタンダードの共通試験があり、これに合格しないと卒業資格も与えられないし、高校進学もできない。高校は2年制で14、15才の年



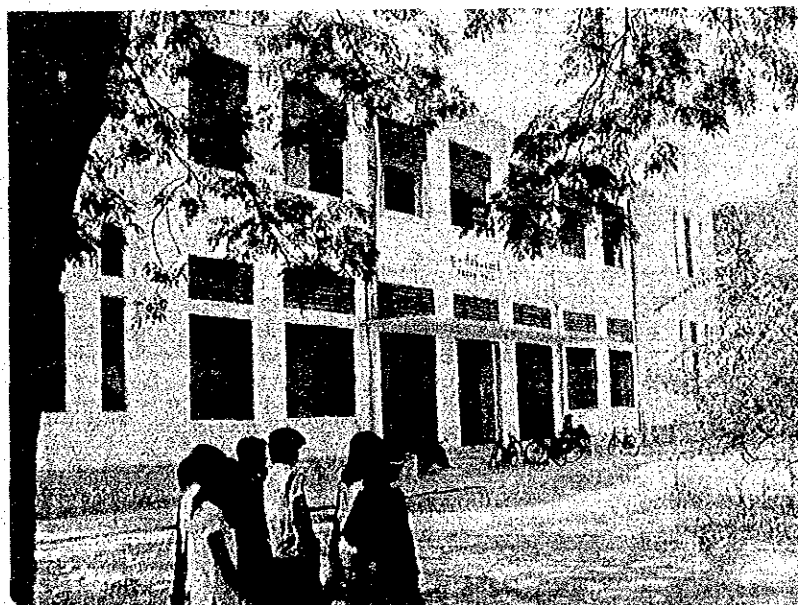
ラングーンにある中学校

令層が就学する。高校の中には職業高校（農業及び技術）もあるが、都市部ではその大半が普通高校である。高校への進学率は全体の10%以下といわれるが、これも都市部では、かなり高い割合にみえる。ビルマの学校は、高校といえば幼、小、中、高校とつながっており、中学校は幼、小、中学校、小学校は幼、小学校となっている。そこで義務教育の時点から、熱心な親は高校下の幼稚園に入れたがり、日本でいう名門校の評判もある。高校修了時には10スタンダードの共通試験があり、これに合格しなければ、大学もしくは短大の受験ができない。また別に苦学生のための大学受験資格試験もある。

高等教育は大学、短大に分かれる。短大は大多数が3年制で一般教養課程のみのもものと、職業訓練、教員養成課程のもものとあり、各州、各管区に分散している。職業課程には農業、技術（工学）、商業（経済）があり、特殊なものには美術、音楽もある。教員養成課程は、修業年限が1～3年に分かれている。短大卒業者には diploma の称号が与えられる。大学は、ラン



ラングーン大学女子学生達



マンドレー大学

グーン、マンダレーの2学が有名だが、いずれも4年制文・理系大学である。このほかに経済大学、教育大学（以上ラングーン）、農科大学、獣医畜産大学（以上イエジン）等の単科大学がある。さらに工科大学（ラングーン）は6年制であり、医科大学は7年制である。大学の卒業生には bachelor の称号が与えられる。

表I-2は、1987/88年版国会報告書にある学校統計である。これによると小、中、高校とも、年々その数を増加しており、政府の学校教育にみせる熱意がうかがえる。同時に一般の風潮としても、親は食べるものをつめても子供を上級の学校へ進ませたいといったところがあり、全般的にビルマは教育熱心な国といえる。

図1-2 ビルマの学校制度

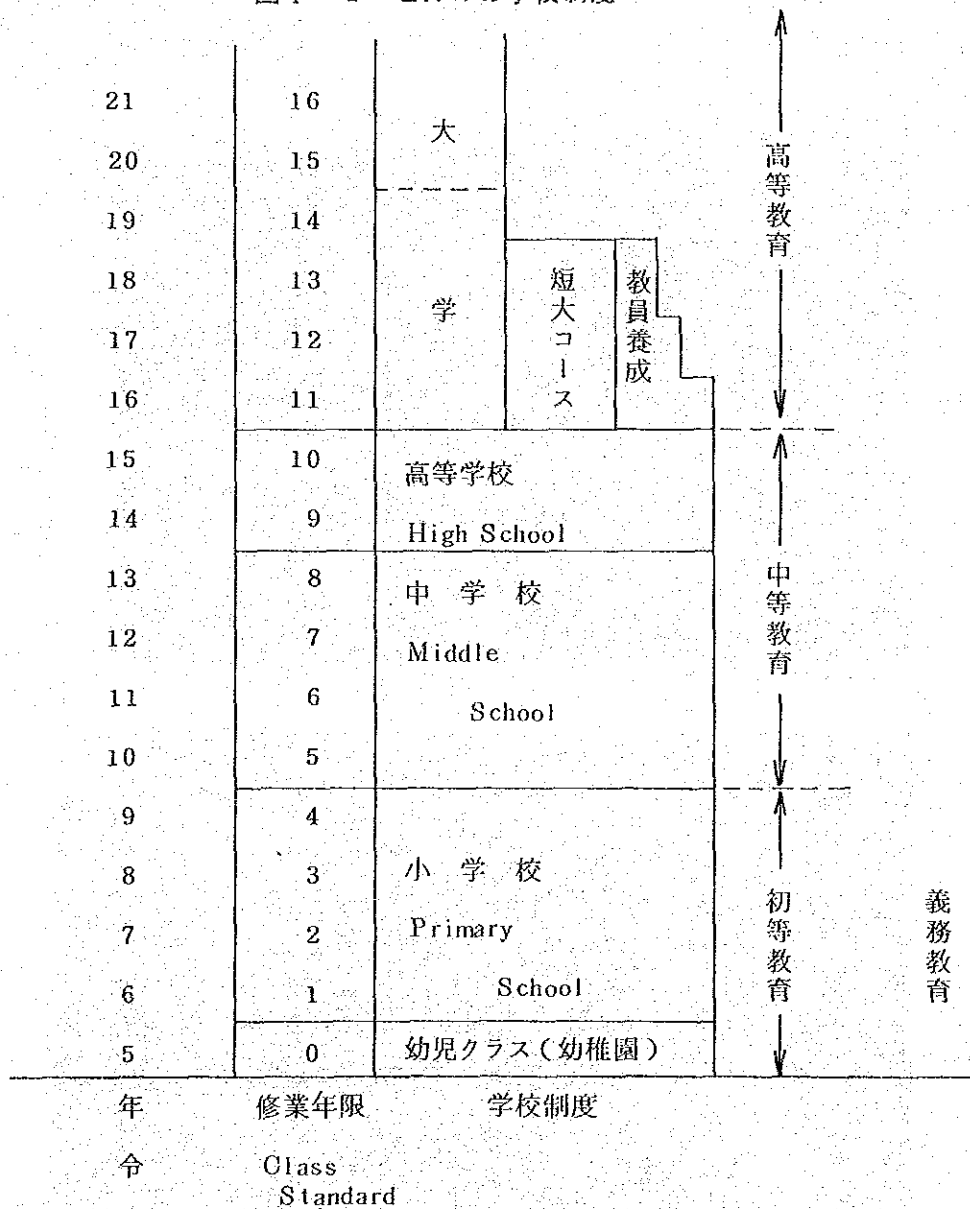




表1-2 最近3カ年の学校統計

項目 学校名	1984/85				1985/86				1986/87			
	学校数	教員数	学生数		学校数	教員数	学生数		学校数	教員数	学生数	
			在学生	卒業生			在学生	卒業生			在学生	卒業生
小学校	25,499	95,435	4,615,888	371,030	31,499	114,767	4,713,179	378,850	33,499	158,934	5,056,961	406,484
中学校	1,492	25,614	953,863	69,172	1,702	41,624	1,054,682	76,483	1,772	43,155	1,125,632	81,628
高等学校	651	13,067	268,325	34,951	725	15,792	255,043	52,610	750	16,117	238,498	44,369
技術専門学校	14	414	4,236	1,164	13	374	4,286	1,102	12	361	4,415	1,215
農業専門学校	9	85	901	515	9	95	608	332	9	90	420	218
ナショナルグループ開発校	1	62	741	165	1	62	775	175	1	126	1,000	200
師範学校	13	243	2,165	2,157	14	271	3,540	3,540	15	306	4,040	4,040
職業養成校	3	117	964	947	4	185	3,000	3,000	4	185	3,000	3,000
技術短大	7	271	4,374	1,009	8	310	4,819	1,040	10	397	5,414	1,235
農業短大	6	96	1,152		6	140	907	458	7	167	1,255	487
その他職業訓練校	33	210	3,913	3,114	33	212	3,679	2,843	35	257	4,639	3,554
技術夜間校	7	93	3,126	2,019	7	93	2,885	1,906	7	93	3,540	2,185
総合大学(文理系)	2	2,416	44,529	8,205	2	2,475	51,471	10,057	3	3,636	66,670	9,981
上級一般短大	4	798	13,175	1,677	4	855	15,828	2,675	6	1,017	16,711	3,457
一般短大(教養課程)	14	673	12,419	3,613	14	673	15,991	4,680	11	781	14,858	7,121
医科大	3	598	4,505	576	3	598	4,471	511	3	701	4,334	561
歯科大	1	42	428	59	1	46	412	62	1	79	406	62
獣医大	1	39	873	147	1	39	878	130	1	58	870	101
経済大	1	200	5,447	1,423	1	200	5,183	1,379	1	288	5,265	1,001
ラングーン工科大学	1	268	5,324	603	1	268	5,395	694	1	371	5,289	745
農科大	1	92	1,574	276	1	92	1,835	310	1	130	1,996	240
教育学大	1	156	1,569	1,132	1	156	1,884	916	1	161	2,149	1,427
外国語大	1	105	925	172	1	105	1,077	128	1	105	1,127	298
医科大学インターコース	5	107	95	87	5	107	78	75	5	107	70	50
通信大			84,052	11,269			79,964	11,880			91,748	10,562

出所) 1987/88年版ヒルマ国会報告書

## II. ビルマの風土

### II-1 ビルマの地勢

ビルマの地形は、大雑把にみて東、北、西方に山岳地帯が連なり、その山々に囲まれた大平原が中央に位置し南に開けている。そこでこれらの地形を大きく分けて、西部山地、中央低地、東部山地の3つに分けることができる。

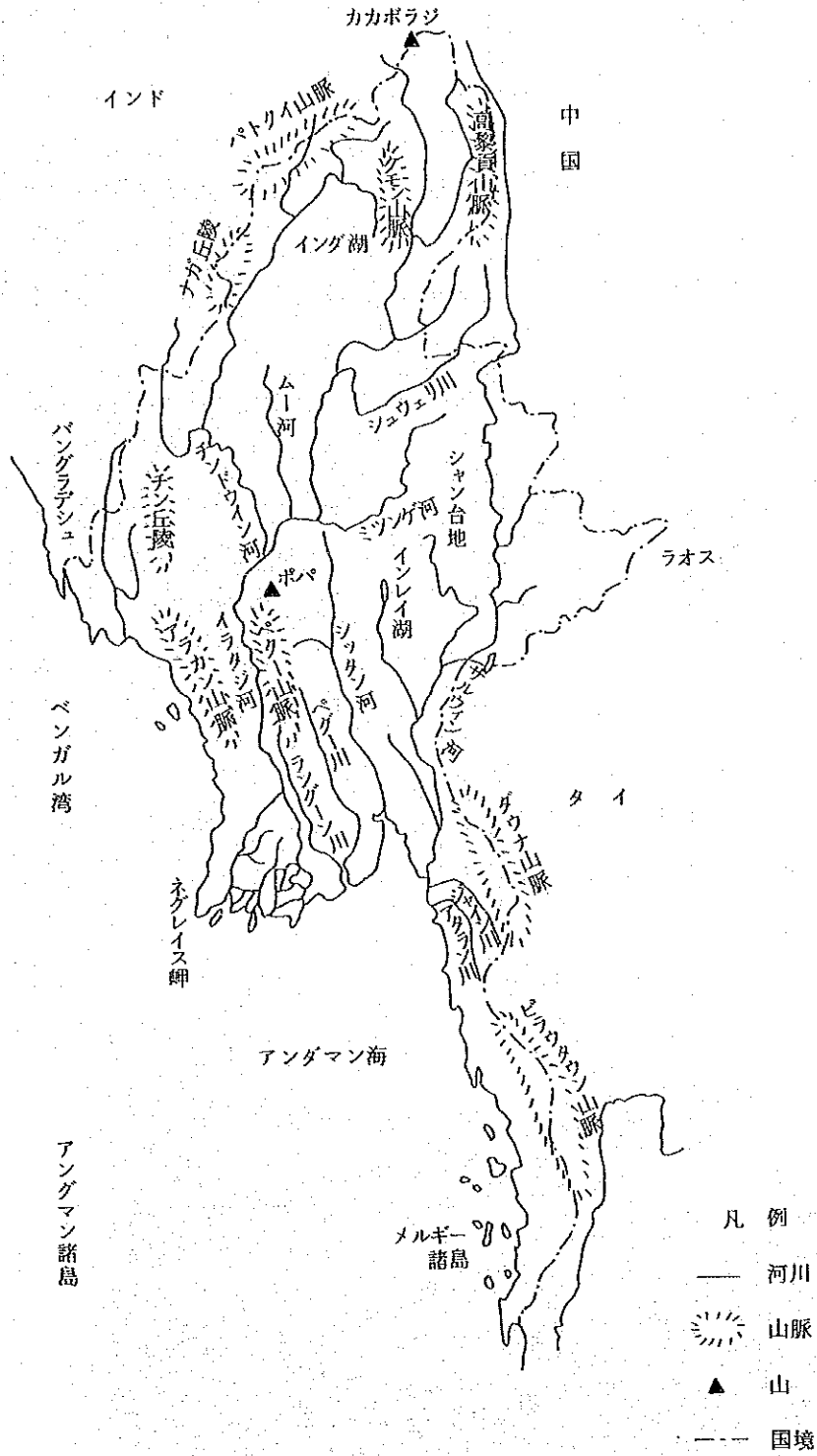
西部山地は、最北部ヒマラヤ山系の東端、5,000 m級の高山から始まり、真南に伸びる山系と南西方に伸びる山系とに分かれる。南西方には国境沿いに、2,000 m級のパトカイ山脈、やや低くなるナガ丘陵、ケン丘陵と連なり、アラカン山脈となる。アラカン山脈は末端をネグレイス(Negrais)岬まで続けている。イラワジ河最大の支流、チンドウィン(Chindwin)河はさらに細かく支流を分けながら、これら西部山地の間から流出している。これらの山岳地帯は森林が繁茂し、川はみな急流で、マラリヤ地帯でもあり、東西の交通を大きく防いでいる。西部海岸サンドウェイ(Sandoway)は、有名な景勝地であるが、アラカン山脈の障壁は陸路を容易にせず、観光客は空路に頼っている。

ビルマ最北端のカカボラジ(Hkakabo Razi)山、5,881 mは万年雪と氷河を持つといわれるが、そこから東南に伸びる山岳地帯が、東部山岳地帯である。中国雲南省との国境をなしている高黎貢山脈(Kaolikung)が走り、その西側はイラワジ河、東側はサルウィン河が流れている。約400 km南には、シャン台地が広がり、1,000~1,200 mの高原にところどころ2,000 m以上の山が連なっている。この台地は温帯性気候に恵まれて、有力な高原野菜の産地ともなっている。

高黎貢山脈の東側を流れるサルウィン(Salween)河は、流程2,410 kmにも及ぶ大河で、その源流は遠く中国チベット高原にその端を発し、ビルマシャン台地に入って多くの支流を合わせ水量を増していくが、いずれも山峽を流れ中流には平野を作らない。河口付近に至って、アタラン(Ataran)川、ジャイン(Gyaing)川とともに、モン州モールメン(Moulmein)周辺に沖積平野を作る。シャン台地からタイ国境沿いに、テナサリム海岸線と平行するように、ダウナ(Dawna)、ピラウタウン(Bilauktang)山脈が走るが、最高峰は2,000 mを越えるものの大部分は1,500 m以下の山脈である。なおテナサリム海岸沿いには、大小数百の島々が浮び、南方にはメルギー(Mergui)諸島がある。

東西の山地に囲まれた形で、中央に大平原がある。これは南北1,100 km、東西200~250 kmに及ぶ広大なもので、北方にクモン(Kumon)山脈、南方にペグー(Pegu)山脈が南北に走り、平原を東西に分けている。そしてペグー山脈の西側をイラワジ(Irrawaddy)河、東側をシッタ(Shittang)河の2大河が流れ、その沖積とかつて奥深く入り込んでいた海の堆積層とでできた平原といわれる。イラワジ河はその源を遠く中国チベット高原南東隅に持つが、全長2,090 kmの大河で、ビルマ北西部の山岳地帯を流れ下り、いくつかの支流を集めてこの事点で川幅400 mに及ぶ。マンダレー(Mandalay)を過ぎて最大支流チンドウィン河を合流するこ

図II-1 ビルマ地勢図



るから、さらに河幅、水量ともに豊かになり、勾配1万6千分の1という緩流になる。流域面積約43万平方kmといわれ、豊かな水量から有力な交通路ともなっている。最後はアンダマン海に注ぐが、河口付近は無数に分枝して典型的な三角州地帯を作り、海拔30cm以下の地域が5,200平方kmもあるという。シタン河は全長560kmで比較的短い河であるが、ビルマ中央平原の一方の大河であり、もともとはイラワジ河流域であったものが、土地の隆起で流れを変え、シタン河が残ったと考えられている。短い割合に河幅、流量ともに大きい。

図Ⅱ-1は、ビルマの地勢略図である。

## Ⅱ-2 気 候

ビルマは北部を除き総体的には亜熱帯に属し、モンスーン型気候が支配的である。北部高地と、山地の陰にあたる中央の乾燥地帯はやや例外となる。またアラカン山脈の西側、ベンガル湾岸は、インド洋からの夏の季節風を直接受ける地域である。モンスーン型気候は次の3季に分けられる。

- ・暑乾季(Pre-monsoon) 通常2月下旬から5月中旬までをいい、1年中で最も暑い季節である。連日、日中は30度を越え、ところによっては40度を越す。全く乾ききったカラカラ天気であり、酷暑と乾燥のため雑草が枯れたりする。ビルマ暦新年は今季4月17日であり、人々はそれ以前約1週間(休日は13~16日)、水祭りを楽しむ。水祭りはもちろん仏教の影響を受けた行事であるが、人々はだれかれなしに水をかけ合ってさわぐ。暑気払いのひとつの知恵ともみられる。ビルマの学校の夏休みは、4、5月の2カ月間である。
- ・雨季(Monsoon) 5月下旬から10月中旬までをいう。4月中旬の水祭りは一種の雨乞い行事であるという人もいる。猛暑に疲れた人々は、雨を待ち望むようになる。本格的に雨が降り出すのは、毎年5月下旬からである。そして雨が降り出すと気温はぐんと下る。ビルマの雨季は、毎日のように雨が降り、降らないまでも曇天が続く。年間雨量は日本の平均より、



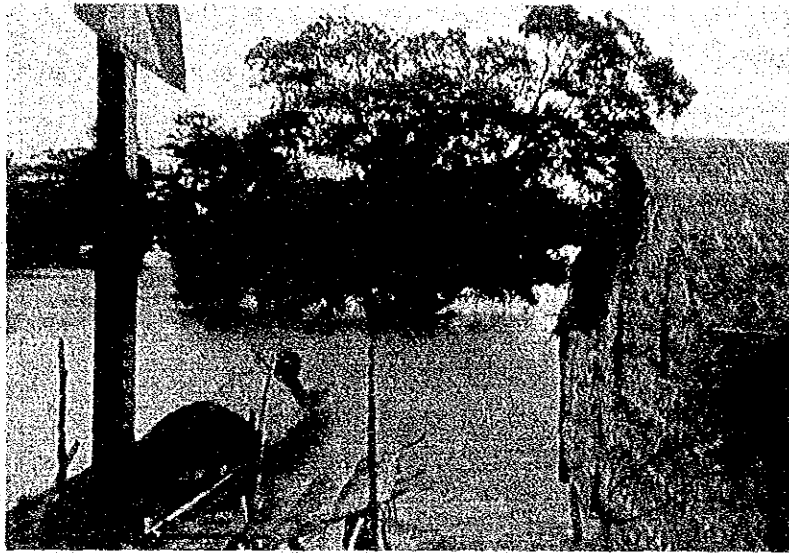
水祭り風景

表Ⅱ-1 各都市における気温と降水量

観測都市 (標高m)	月平均気温(上段℃)と降水量(下段mm)												年平均
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
ラングーン ( 23m)	24.3	25.2	27.2	29.8	29.5	27.8	27.6	27.1	27.6	28.3	27.7	25.0	27.3
アキアブ ( 4m)	20.2	22.1	25.9	29.3	29.7	27.7	27.1	26.9	27.6	27.6	25.1	21.7	25.9
マンドレー ( 74m)	20.3	23.0	27.5	31.8	30.9	29.6	29.5	28.6	28.8	28.1	25.1	22.2	27.1
ミッチーナ ( 145m)	17.1	18.9	23.2	25.9	27.5	27.4	27.4	27.4	27.5	25.4	21.6	17.7	23.9
タウンジ (1,436m)	13.9	16.2	20.3	23.2	22.0	21.1	20.8	20.7	20.9	20.2	16.7	14.3	19.2
	1	10	3	33	249	198	287	330	216	173	38	15	1,553

注) 出所: 綾部・永積編「もっと知りたいビルマ」 弘文堂発行

1,000 mm以上多い地域が多く、その雨量が5カ月で降るのであるから、雨の激しさがわかるであろう。とくに例年6月中旬から8月一杯は雨が激しい。この時期に全降雨量の60～70%が降る。年間雨量は、ラングーンで2,500 mm以上、アラカン州アキャブでは5,000 mm近く降る。北部カチン州ミッチーナでも2,000 mmを越すし、シャン高原のタウンジーでも1,500 mm以上の雨量がある。ただ中央マンドレーからマグエにかけての長円形の地帯は、年間雨量1,000 mm以下となって、中央ドライゾーンを形成する。ビルマの雨季は気温が下って、猛暑季を過ぎ、ほっとするが、しばらくすると猛烈な湿度に悩まされる。7、8月の雨季最盛期には湿度90%を越す日が続く。そして思わぬものまでカビが生えたりする。しかし、このモンスーン季は、ビルマ稲作にはなくてはならないものであり、大部分が天水田であるビルマ稲作にとっては、恵みの雨といえる。



雨季の農村の風景

・乾季 (Post Monsoon) 10月下旬から雨が上り、翌年の2月中旬ごろまでがビルマでは最高の季節である。この時期は雨もほとんど降らず、かといって雨季の残した水分でそれほどカラカラではなく、気温も下ってしのぎやすい。それでも日中はかなり高温となるが、朝晩の冷気は気持ちが良い。11月から12月に稲の収穫を終るが、残留土壌水分をあてにして裏作物の種をするのも、この時期である。また観光客もこの時期が最も多くなる。ビルマでは太陽暦の新年は全く何もしないので、この時期に到来する暮から正月は、平常と変わりなく過す。

以上がビルマの気候のあらましであるが、北部の一部及び高地を除いて、年間平均気温も26度から30度までにおさまり、南部バセイン (Bassein) では12カ月の温度較差が6度しかないという。北にいくに従いその差はひろがるが、むしろ1年の温度較差よりも、1日の温度較差の方が大きいようである。

表Ⅰ-2 ラングーン・カバエ中央気象台観測気温

(上段最高, 下段最低°C)

年 \ 月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1981年	32.5 17.8	34.8 18.2	36.8 21.3	37.8 24.0	34.2 25.4	30.3 24.3	29.7 24.4	29.5 23.7	31.1 24.7	31.2 24.8	31.1 23.5	29.3 19.1
1982年	39.9 17.5	33.9 18.6	37.5 21.4	37.4 24.7	34.2 25.5	28.9 24.5	30.2 24.3	29.1 24.6	30.0 24.5	32.1 24.1	33.3 22.6	31.6 17.2
10年の 平均気温	24	25	30	31	32	29	28	28	29	28	26	24

表Ⅰ-3 ラングーン・カバエ中央気象台観測平均湿度

(単位%)

年 \ 月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1981年	56	53	51	57	76	88	89	90	85	80	72	62
1982年	56	48	60	55	63	90	93	88	91	78	78	68
10年の 平均湿度	63	55	55	56	77	89	90	92	89	84	77	71

表Ⅱ-4 ラングーン・カバエ中央气象台観測降水量及び降水日数

単位上段 mm 下段日

年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
1977	25	-	-	11	210	318	591	685	282	139	-	-	2,262
	3			2	17	25	26	28	18	10			129
1978	-	-	-	-	393	369	297	685	344	144	-	-	2,232
					15	20	22	28	19	13			117
1979	-	-	-	35	288	542	423	500	273	126	-	-	2,267
				2	14	26	22	26	14	8			112
1980	-	-	-	36	641	375	439	605	619	188	-	-	2,913
				2	17	20	25	27	25	11			127
1981	-	7	6	20	228	452	586	634	282	244	77	-	2,536
		1	1	3	13	22	25	25	18	12	6		124



## II-3 農村と都市

### 1) 農村

ビルマの人々は、その大半が農村に居住するといつてよい。都市への人口流出が年とともに多くなつてゐるとはいへ、まだ都市の発達は未熟である。村の様子は、地域によつて、また営まれる農業の形態によつて異なると思われるが、そう多くの農村を見る機会に恵まれないので、ラングーン郊外（下ビルマ地方稲作地帯）の農村について記述する。

この辺の村は、ほとんど塊状の集村である。道路沿いに、あるいは河川沿いに列状の集村もあるが、それはごく一部で、広大な平野の水田の中に、ところどころこんもりと森が見え、それが村である。村は必ずタマリンド、ヤシ、マンゴーなどの樹木が茂り、日中でも多くの日蔭を作る。道路は細く牛車の通路になつており、2本のわだちがくっきりとついている。



隊列を組んで走る牛車

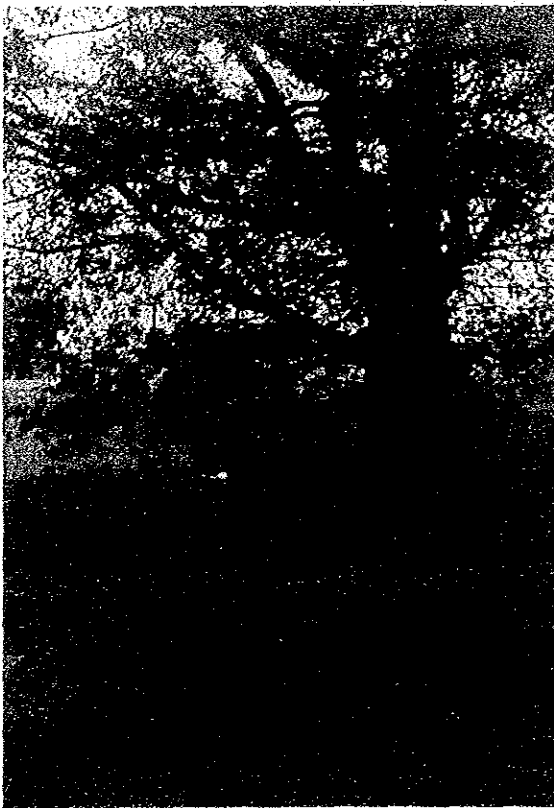


ある農家

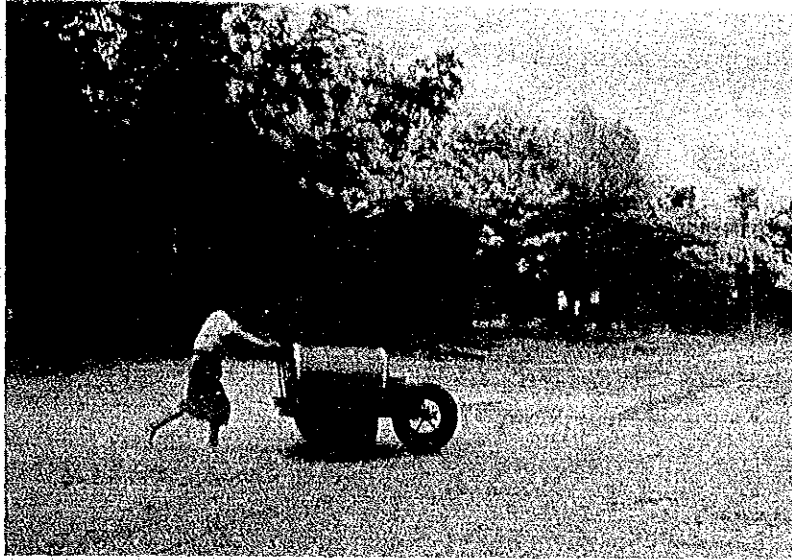
雨季には簡単に水路と化し、乾季にはもうもうとほこりをまい上げる。乾季に遠くから見てみると、煙のように砂塵が舞い上がりその先には牛車がガタガタと走っている風景が、大変印象的である。

そんな村の中に、木造または竹造の高床式農家が建っている。一軒ずつ垣根をめぐるしているところもあり、数軒がまとまって建ち垣根を持っていることもある。農家はこの辺ではほとんど高床式で、床下には家畜（牛や豚）が飼われたりする。別に牛舎を持った農家もある。本造家屋はかなり上流で、大部分は竹で編んだアンペラを壁にし、屋根はニッパヤンで葺いている。この屋根は、ほとんど毎年どこかを葺きかえている。アンペラ壁に石灰を塗っている家もある。床は板敷きが多く、多くの場合1部屋である。中をちょっとした家具などで仕切っていることもある。人々はこの板敷にごろ寝するか、せいぜいアンペラごさを敷いて寝る。台所は軒さしにかまどがあって土間である。燃料は薪、わら、もみがらなどである。主屋、米貯蔵庫、家畜小屋（いずれも竹柱に簡単な屋根をつけたもの。）などを持つ農家もある。庭には、バナナ、パパイヤなどの果樹が植わっている。

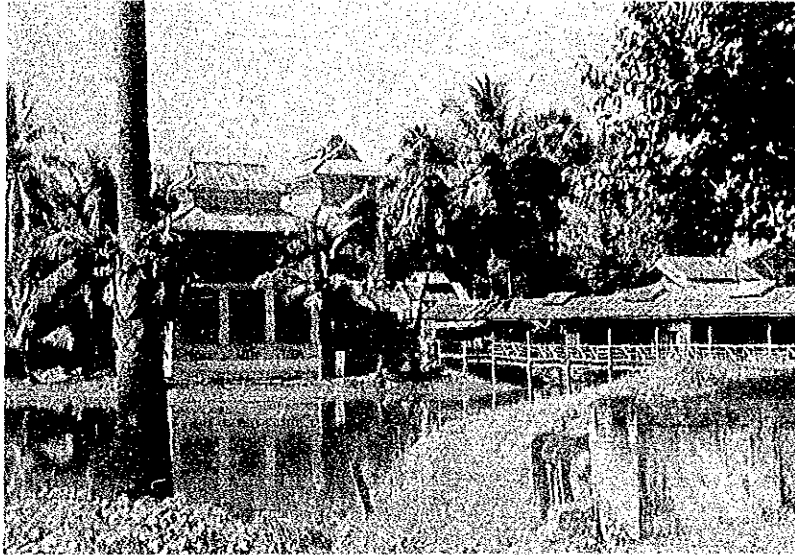
普通、村は100～150、人口500～600人が多く、上下水道、電気設備はほとんどない。生活用水は、共同井戸、池沼、河川に頼る。これらの水汲場は一種の社交場である。また生活用水の運搬作業は、婦人や子供達の重要な日常作業である。肩でかついだり、頭にカメをのせたり、個輪車で運んだりする。やや遠隔地では、大ガメを牛車にのせ、牛で運ぶこともある。この場合は男の仕事である。村はずれの菩提樹の根かたに、よく小さな空の祠をみかける。ナツを迎える祠である。一村で、あるいは数村で、必ず大小の差はあって



菩提樹の根かたのナツの祠



生活水を運ぶ



ある僧院

もパゴダがある。練瓦を積み漆喰で塗りがためたものが多い。広々とした田園のところどころに丸い森がみえ、その一隅に白いパゴダがそびえる風景が、ビルマの典型的な農村である。また多く村と村と結ぶ道路沿いに、これはやや本格的な建築の僧院がみられる。何人かの僧侶のほか、得度した子供達や、修行を望む大人達もときどきはみかける。人々は、托鉢僧への寄進にそなえて、あらかじめ余計にご飯をたき、副食を用意する。また仏教暦によって定期的に斉日の法話を聞きにいったりする。

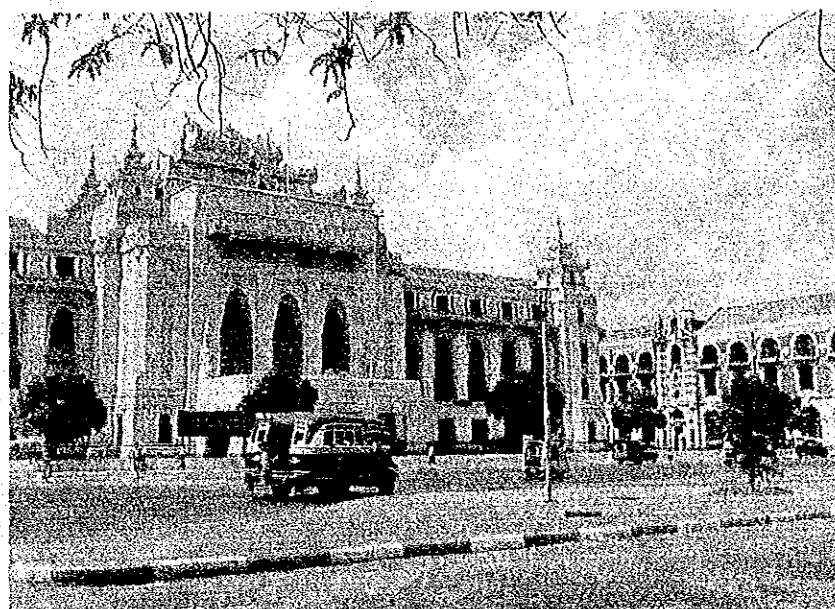
もちろんこれらの村はビルマ族の村で、中にはカレン族だけの住む村や、インド人の村などもあり、これらは多少様子が異なる。

## 2) 都 市

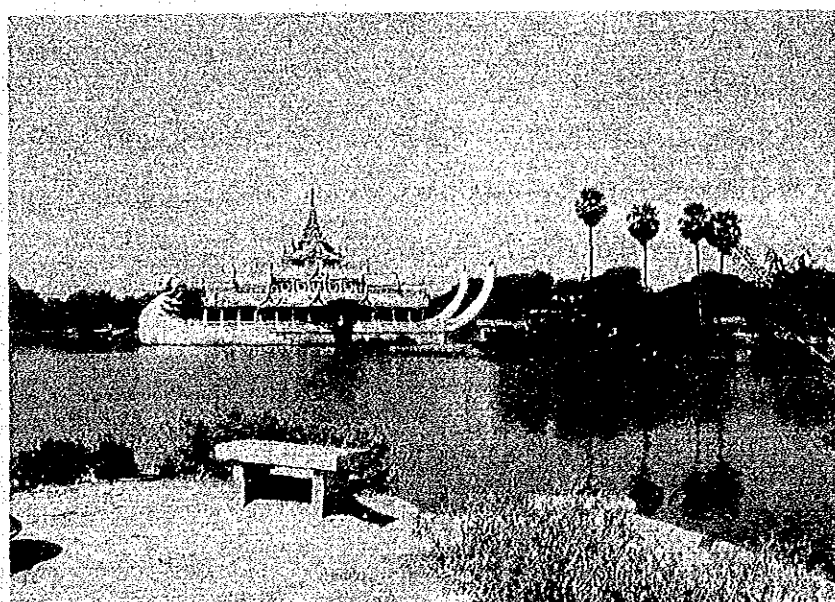
首都ラングーン (Rangoon) 古くはコンバウン王朝開祖期の1700年代中期に、現在地のやや北側に町の建設がなされたといわれるが、現在のラングーンのはほとんどは、英国が植民

地政策の拠点として建設したものである。ビルマ国の首都として、政治、経済、交通、文化の中心地であり、1961年近隣タウンシップをとり込んで市域を拡大し、推定人口250万人以上といわれる。しかし市街地を歩いてうける印象では、それほど大きな都市とは思えない。

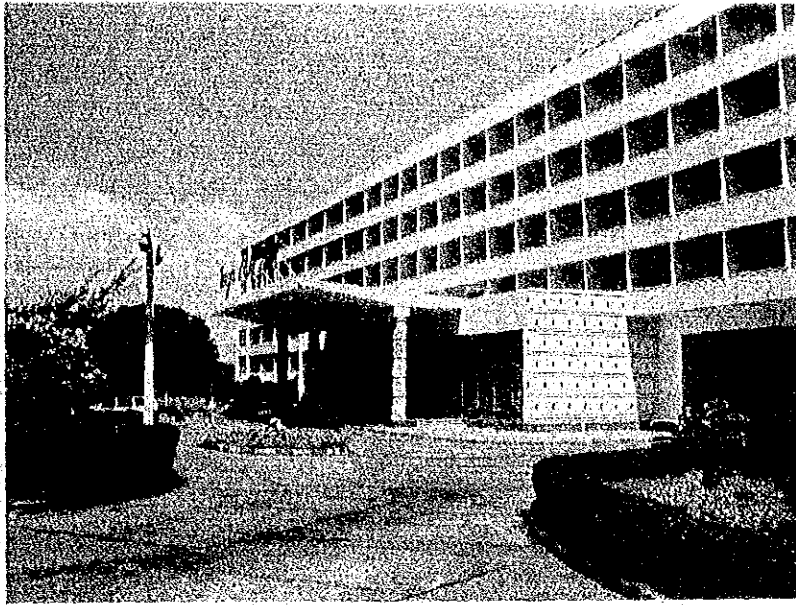
ダウンタウンの中心地、ラングーン港近くには、独立記念塔、市庁舎、政府庁舎、銀行などがたち並び、道路も広く近代都市の様相を持つ。そのほかラングーン駅庁舎、その前にはアウンサンスタジアムがあり、大病院のほかいくつかのマーケットや映画館もあり、終日にぎわいをみせている。少し北に入って、ロイヤル湖周辺には、動植物園やカラウェイレストランもあり、美しい公園を作る。日本大使館もこの周辺にある。その北側が緑多い住宅街となり、石造りの外国人向け住宅も多くなる。さらにその北側にはインヤ湖がひろがり、そのふちにはソ連の援助で建てられたインヤレークホテルがある。



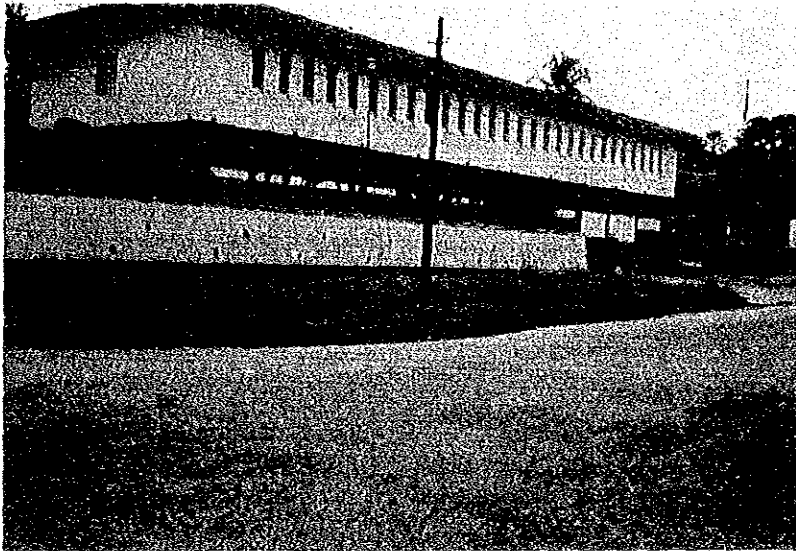
ラングーン市民ホール



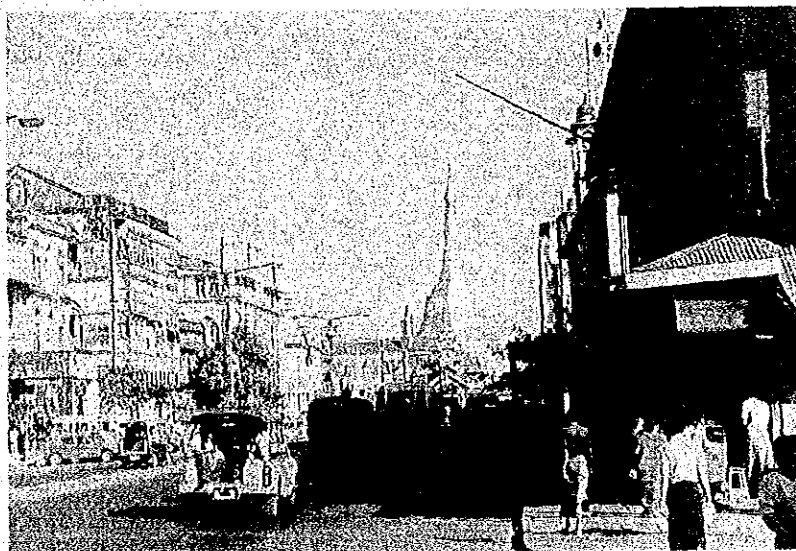
ロイヤル湖とカラウェイレストラン



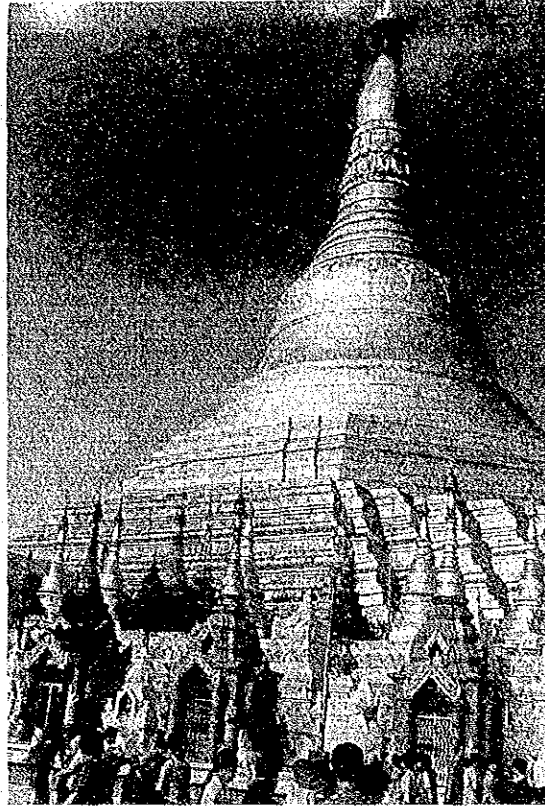
ソ聯の援助で建てたインヤレークホテル



日本大使館



ラングーンにあるスーレーバゴダ



ラングーンの象徴 シェダゴンパゴダ

大小様々のパゴダは、無数といってよいほど沢山あるが、ダウンタウンの中心にあるスーレー(Sule)パゴダの金色の輝きや、ラングーンのシンボルといわれるシェダゴン(Shwedagon)パゴダ(高さ99mの黄金塔)はとくに有名である。

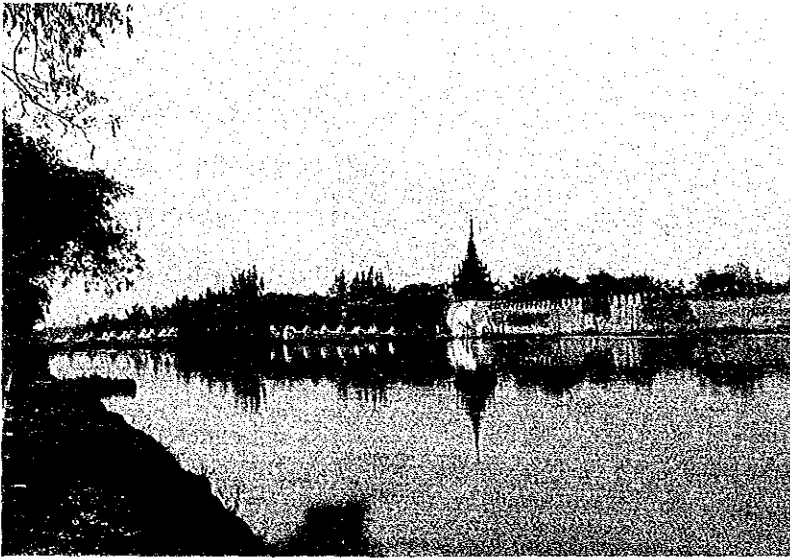
古都マンダレー(Mandalay) 古都マンダレーは、ビルマのほぼ中央に位置し、コンバウン王朝時の首都であり、ビルマ王国時代の最後の都である。イラワジ河中流の左岸にひらけ、海拔75m、人口推定60万人といわれる。第2次大戦の被害を多く受けた都市であるが、王宮跡城壁やそれをめぐる堀、その北側のマンダレーヒル(高さ236m、全山パゴダ)、シュウェナンド僧院(Shwe Nandaw)、クトドウパゴダ(Kuthodaw)など、多くの史跡をみることができる。

マンダレーは、中央ビルマの交通中心地であり、商業都市でもある。従っていろいろな品物の集積地であり、伝統的工芸品の産地でもあり、醸造工業などもある。比較的雨量の少ない地帯であり、この近部はビルマでもっともかんがい農業の発達した地域である。

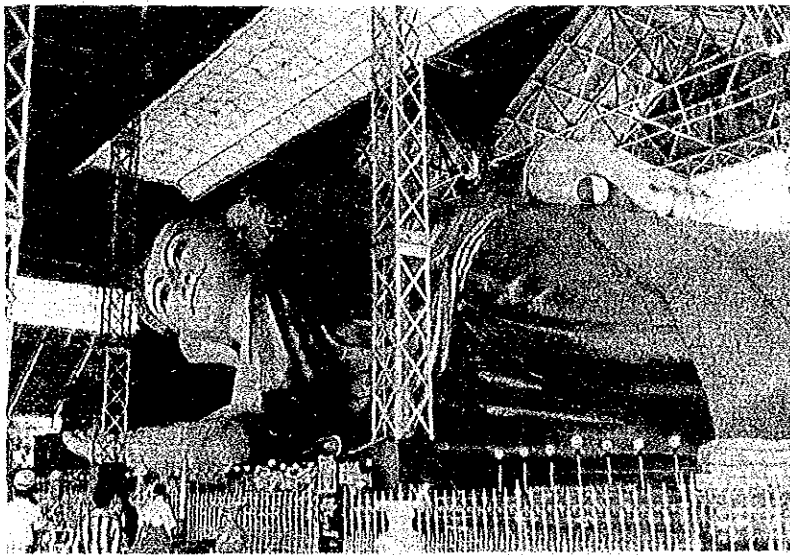
またビルマで有名な避暑地メイミョウ(Maymyo)の玄関口にも当る。

以上の2大都市のほか、ラングーンから車で2時間足らずでいけるペゲー(Pegu)は、西暦800年代からの古都といわれ、ペゲーディビジョンの州都であり、世界最大の寝釈迦、シュウェタリヤウン(Shwethalyaung)があることでも有名である。南に下ってモン州には、州都モウルメン(Moulmen)があつて、港都として種々の物資の集積地である。さらにラン

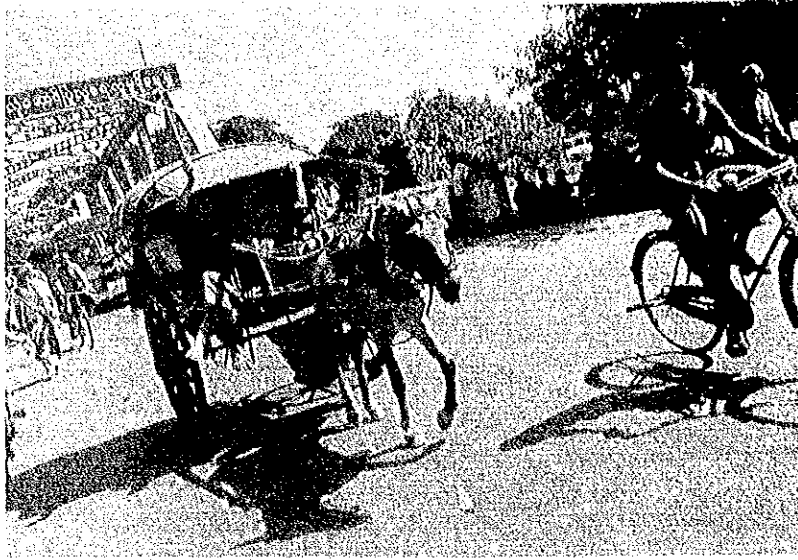




マングレーにある王宮城壁  
内部は戦災で焼失



ペグーにある世界最大の釈迦



地方都市へいくとボニーカー



インレ湖の水耕栽培